

ルーシー・オズバーンの功績と豪州看護の今日－フィールド調査を通じた国際看護学的考察

A Nursing Field Study in New South Wales: From Lucy Osburn's Nursing Revolution in the 1860s to Current Australian Nursing

小松容子

Yoko Komatsu

宮城大学看護学群

School of Nursing, Miyagi University

【キーワード】

ルーシー・オズバーン
オーストラリア
看護史
国際看護
文化ケア

Lucy Osburn

Australia

Nursing history

International Nursing

Culturally sensitive care

【Correspondence】

小松容子
宮城大学看護学群
komatsuy@myu.ac.jp

【COI】

本論文に関して、開示すべき利益相反関係事項はない。

Received 2024.05.31

Accepted 2024.07.19

Abstract

Both Florence Nightingale and Lucy Osburn laid the groundwork for modern nursing in Australia. Osburn was one of Nightingale's pupils and was deeply involved in Australian nursing. This study delves into the historical development of nursing in Australia and the progressions following the introduction of Florence Nightingale's style of nursing. Furthermore, this study describes how a culturally respectful health system is a valuable aspect of current Australian nursing.

A field study was conducted in New South Wales, Australia, between 2023 and 2024. Data were collected by photography and note-taking. Australian nursing was examined through historical, international, and cultural lenses by analysing various literature and the researcher's field notes.

In this paper, the development of nursing in Australia and Lucy Osburn's notable achievements are described. Her accomplishments and capacity for nursing reform are discussed from an international nursing perspective. This is followed by describing a cultural aspect of current Australian nursing and nursing education. Because of Australia's diverse population, the Australian healthcare system offers culturally sensitive services to Indigenous Australians and works to improve the health of Aboriginal people. The field study concluded that culturally sensitive care approaches in Australian nursing are worthy of emulation in Japan to improve the quality of nursing. This implies that Japanese healthcare policies and systems should embed consideration of the health needs of Ainu people.

はじめに

フローレンス・ナイチンゲールに関しては、数多くの書籍、論文で取り上げられているが、その弟子であり、豪州における現代看護の幕開けに貢献したルーシー・オズバーンについては、日本ではあまり知られていない。本稿では、豪州・ニューサウスウェールズでの看護の始まりとオズバーンによる看護改革について文献研究によって探求すると共に、ニューサウスウェールズ東部シドニーでのフィールド調査（2024年3月）をもとに、看護におけるオズバーンの功績を国際看護学および異文化看護学的視点で考察を進める。さらに、ニューサウスウェールズ北東部リズモアでのフィールド調査（2023年3月）も踏まえて、多文化・異文化に配慮したケアについて考察し、日本における看護政策・看護教育の更なる発展に向けた示唆を得たい。

豪州看護におけるルーシー・オズバーンの看護改革と国際看護

1. 豪州における現代看護の開拓者

ルーシー・オズバーン（Lucy Osburn, 1837-1891）は、英国ロンドンにある聖トマス病院のナイチンゲール看護学校の修生であり、「ナイチンゲールの六人の弟子」のひとりである[1-3]。そのオズバーンは、豪州ニューサウスウェールズのシドニー病院においてナイチンゲール式看護学校を始めた人であり、豪州における現代看護の開拓者である[1, 4]。そもそもなぜ、彼女がシドニーへ赴任することになったのか。それは、当時の豪州は、英国の植民地であり、植民地政府の管理下にあるシドニー病院へ、英国でトレーニングを積んだ看護指導者を派遣してほしいという協力要請が、ナイチンゲールに届き、オズバーンと彼女に同行する看護指導者5名が選ばれたという経緯によってである[5]。オズバーンは単に女性総監督（看護部長兼女性院長）として植民地政府に雇用されただけでなく、社会構造の変革に関わっていた[6]。彼女に求められていたのは、植民地における傷病者への看護を改善させることであるが、それは病院の組織文化や女性の社会的地位、看護の専門性の確立と深く関連していた。また、シドニー病院内に看護学校を創設し、ナイチンゲール式看護を植民地全体に普及させるという特別な使命があった[6, 7]。

オズバーンをはじめとしたナイチンゲール看護学校修生から構成される看護チームは、英国を出発し、3か月の航海を経て豪州へ渡り、シドニーへ到着したのは1868年、オズバーン31歳の時であった。オズバーンら英国から渡ってきた看護師たちは歓迎されていたが、一方で、彼女をよく思わない官僚や医師もいて[8]、当時30代前半の彼女にとっての看護改革は容易なことではなく、苦悩と困難の連続であったことは想像に難くない。

2. 国際看護とルーシー・オズバーン

英国から豪州に渡ったオズバーンの活動は国際看護活動といえよう。さらに、当時の豪州の社会状況は、英国と比べると不安定で、病院等は十分に整備されておらず、オズバーンの活動は開発途上国での看護活動といえる[9]。また、異文化看護活動も含まれていたと考えられる。それはオズバーンが豪州に到着する以前に、すでに様々な文化的背景を持つ人々が豪州に到着していたことから推察される。豪州は1788年より英国からの流刑者の移送先であり、その中には、英国人の他にアフリカ、アメリカ、フランス人の囚人が含まれていたとある[10]。また1830年代から始まったゴールドラッシュによって、ニューサウスウェールズには、アイルランド、ドイツ、中国などからの数多くの移民、商人が到着していた[11]。オズバーンがシドニー港に到着した1868年には、豪州での囚人受け入れは終わりを告げていたが、様々な文化的背景を持つ人々が生活し、そのような人々への看護も提供されていたのではないかと考えられる。

オズバーンの国際看護としての活動は、それまでのシドニー病院の看護の在り方とは異なるものであり、ナイチンゲール式看護の導入に伴う衛生環境の改善や看護の大改革のために、複合的な文化・価値観の差異を乗り越えなければならなかった。さらに、シドニー病院の女性総監督Lady Superintendent of Sydney Hospital という肩書に、挑戦的な態度を示すもの、露骨に非難してく

るもの、オズバーンの権威を傷つける内容の手紙をナイチンゲールに送るものなど[2]、様々な抵抗や陰謀を乗り越える必要があった。このような逆境の中でも、忍耐強く看護改革を進め、海外において新しい看護体制を作り上げ、現代看護が後世につながるように発展の契機を作った点に、国際看護活動におけるオズバーンの偉大さを見ることが出来る。

ルーシー・オズバーンの看護改革の足跡

1. ルーシー・オズバーンによる看護改革前のシドニー病院の状況

オズバーンが豪州に渡る前のシドニー病院の状況について整理しておきたい。豪州で最初の医療施設は、1788年にシドニー港に設置された救護テントである。1788年は、英国からの最初の植民船団がシドニー湾に到着した年であり、豪州の植民地化が始まった年である。英国から豪州への8か月に渡る航海のため、壊血病や赤痢による患者で、設置された複数のテントはすぐに満員になったとのことである。このテントホスピタルがシドニー病院の前身であり、主な患者は、治療が必要な兵士や流刑者で、ナースは囚人の中から選ばれていた。天然痘が流行した1789年にはアボリジナルへの治療も行っていたとのことである[12]。救護テントは後に木造プレハブ建築へと改善され、その後も石造りの建物へと改良・拡大された[13]。しかし新たに就任したマックアリー植民地総督が訪れた際に、病院の状態が極めて悪いことが判明し、病院改善の着手と同時に、当時の英国君主ジョージ3世を称えて、通称もジョージ・ストリート George St.と改名された[13]。現在そこには、昔の警察署の建物が残されているが、外壁には豪州最初の病院の場所を示すプレートが掲げられている（写真1,2）。



写真1 豪州最初の病院設置場所を示すプレート

(撮影 筆者 2024.3.18)



写真2 最初の病院の場所/George St.(撮影 筆者 2024.3.18)

シドニー港にあった病院が、今のシドニー病院のあるマックアリー・ストリート Macquarie St.に移ったのは、新しい病院建設のためであり、その建築費はラム酒の独占販売権による利益によって成り立っていたために、ラムホスピタルと呼ばれていた[4, 12]。1816年に開設された新病院は、8つの病棟があり、各病棟で受け入れられる患者の定員は22名としていた[4]。公共慈善施設として主な目的は、病気や怪我を負った囚人や貧困者への医療の提供で、後に身寄りのない病弱な貧困者のための保護施設や自宅療養中の貧困者のために薬を提供する薬局が設置された[6, 12]。このような変遷を経て、病院の名称も何度か変わったが、ここからはシドニー病院と呼び方を統一し、病院内の看護の状況をさらに辿っていききたい。

当時、男性患者の看護は男性が担当し、女性患者の看護は女性が担当していた[14, 15]。殆どが男性患者であったため、男性ナースが大多数で[15]、彼らは病棟夫 Wardsmen と呼ばれていた。病棟夫は元患者で、男性患者の中から病棟夫にふさわしい適正が認められると、回復期か退院時に任命されていた。殆どの病棟夫は、傷病を抱えているか読み書きが出来ないかのいずれかであったが、親切で優しく、患者からは感謝されていたため、その数は1858年までに14名に増えたところある[16]。一方、女性患者の看護を担当していたのは、最初は3名の女性囚人で、家族等への看護経験のある年配女性が主に選ばれていた[16]。彼女たちは、朝6時から働き、7時までに病棟の清掃を済ませ、8時までに朝食を全て配膳し、そのほか病院内で必要と思われることを実施し、

Miyagi University Research Journal

21時まで働いていた[17]。男性ナースも女性ナースも、植民地内で犯した罪に対する罰としての病棟労務であったため、看護の質は悪く[17]、中には投獄されることを回避するために自ら看護を選んだ重罪人も含まれていた[18]。看護部長に相当する役職は、メイトロン Marton と呼ばれ、看護経験を積み重ねた年配者が病院内の管理を統括し、全病棟の鍵の管理、患者の入退院の把握、食事療法の指示書の管理、病棟内の整理整頓と清潔保持のための巡回を行っていた。しかし実際の権限は弱く、衛生環境については何年も適切な指導が行われていなかった。そのため病棟の外見は整然とされていたが、建物全体に害虫やネズミがはびこり[16]、感染症患者の包帯にゴキブリが来るなど[14]、悲惨な状態だったとのことである。

この状況を打開しようと医師らが、1864年と1865年に改革を試みたが、いずれも失敗に終わったとある[6]。しかし、適切な看護が外科治療後の回復に必須であるとして、1866年に再び医師らによって、看護の状況の改善と看護師養成の必要性を訴える運動が行われ[6]、同年に実施された病院監査では「病棟夫は気が利いて親切であるが粗雑で、きめ細やかな看護を行うには全くなっておらず技術もない」と報告書が作成された[19]。このようなシドニー病院の醜聞ゆえ植民地政府が、状況の打開を求めてナイチンゲールへ手紙を送ったことは納得である。

また当時の身なりについては、オズバーンがシドニー病院到着後に書いたナイチンゲール宛の手紙から知ることが出来る。その内容は、「薄汚い服装の女性、だらしなく不潔な者、脂ぎった髪が肩や背に垂れ下がり、キャップもエプロンもつけず、それぞれ異なる色の擦り切れた古着を着ている」というものであった[2, 4]。

2. シドニー病院内の看護学校とナイチンゲール・ウィング

ナイチンゲール式看護を豪州に導入したオズバーンにちなんでルーシー・オズバーン／ナイチンゲール博物館 Lucy Osburn Nightingale Museum が、シドニー病院の敷地内にある。博物館となっている建物は、シドニー病院の中で最も古く、オズバーンがシドニーへ到着する1年前に完成し、ナイチンゲール・ウィング Nightingale Wing と呼ばれている（写真3, 4）。当時のままマックアリー・ストリートにあるこの建物が、豪州で最初の看護学校であり、オズバーンは、シドニー到着後の最初の1年間で16人の看護師をここで養成した[12, 14]。ロンドンの聖トマス病院内のナイチンゲール看護学校のように、品行方正な看護師育成のために、看護見習い生は、シドニー病院内の寄宿舎（ナイチンゲール・ウィング）に入った。女性総監督であるオズバーンも、そこに住み込みで指導を行い、1868～1884年の間に153名の看護師を養成し[15]、各地の医療施設に送り出している[20]。



写真3 ナイチンゲール・ウィングの案内板
(撮影 筆者 2024.3.20)



写真4 豪州最初の看護学校の建物／Nightingale Wing
(撮影 筆者 2024.3.20)

オズバーンがシドニー病院に到着後5年経過した1873年に、病院内の看護人員がすべて揃ったとあり、その組織は、女性総監督（看護部長兼女性院長）1名、看護師長4名、看護師17名、看護補助者7名とハウスキーパーで構成されていた[16]。全員が6時から働き、半数は昼過ぎの

Miyagi University Research Journal

13時半から一旦任務を離れ、17時過ぎのティータイム後から再び任務に着き、夜勤看護師との交代時間（20時半～21時）まで働いた。残りの半数は、17時15分のティータイムのベルが鳴るまで病棟に残った。当時の看護師の主な任務は、療養上の世話と衛生環境を保ち感染症を起こさないことであった。ある病棟では、看護師3名で、患者32名の療養を支え、病棟全体をブラシで磨き、破れたリネン類は縫い直し、洗濯することが役目の一部であった。女性総監督のオズバーンは、6時前・正午・夕方・21時過ぎの一日4回、各病棟の巡回を行っていた[16]。

シドニー病院内のナイチンゲール式看護学校は、1985年で閉校しており[19]、現在豪州の看護教育は、1993年以降すべて大学教育へ移行している。このように、オズバーンのナイチンゲール看護学校は今はないが、その軌跡をこの博物館で見ることができる。博物館にはオズバーンの最初の仕事部屋とデスク（写真5）が大切に残されている。その他、オズバーンの寄宿室（写真6）にも入ることができ、そこには、小さいデスク1つ、タンス1つ、ソファ1つに、洗面用具一式と幅の狭いベッドが1つ置いてあった。ここで、オズバーンが着用していたユニフォームを特別に見せてもらうことができた。女性総監督としてのユニフォームは、レースのヘアドレスにダークカラーのハイネックドレスで[6]、袖は長く、裾は床に着くほどで、着用で最低20分要するドレスとのことである。博物館では、オズバーンが巡回の際に使用していたランプや手書きの記録（当時は看護師・医師・患者用の三種類の記録があった）なども見ることが出来た。



写真5 オズバーンの仕事デスク（撮影 筆者 2024.3.21）

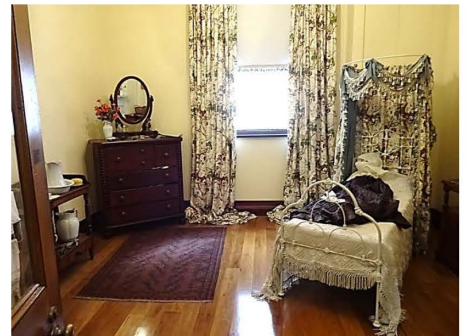


写真6 オズバーンの寄宿室（撮影 筆者 2024.3.21）

註：ベッドの上にあるのはオズバーンのユニフォーム

3. オズバーンが行った看護ユニフォームの改革

博物館では、1868年から現代までの看護ユニフォームの歴史の変遷を迎えるように、時代ごとのユニフォームが展示されており、その中でもライラック色のユニフォームは特別な雰囲気で見られる（写真7）。この色はオズバーンが決めたもので、看護師長はグレー、看護補助者はブラウン、若手看護師はライラック色にしたとのことである[4]。さらに看護師のユニフォームは、平日用・日曜日用・外出用と3種類あり、平日はライラック色のワンピースにエプロンを腰に着け、キャップは白くフリルつきの紐がつき、顎の下で結んでいた[16]。日曜日は、後ろにセミトレーンがついた重厚な素材のブルーのドレスで、外出用は、英国の看護師と同じブラウン色のドレスに黒いマントを羽織り、ボンネットと呼ばれる帽子を着用していた。この外出用ユニフォームの色は、後に英国アルフレッド王子（ビクトリア女王の第2王子）を称える鮮やかな青色（英国王室のロイヤルブルー）に変更された[16]。これは、オズバーンがシドニー港に到着した1週間後の功績と関係がある。それは、豪州入りしていたアルフレッド王子の背中に、アイルランド独立運動派による弾丸が命中するという暗殺未遂事件が起きた際に、負傷した王子の看護のために、オズバーンが、同行した5名の看護師のうち2名を派遣し、ビクトリア女王から感謝が伝えられたというものである[4, 20]。



写真7 平日用看護ユニフォーム（撮影 筆者 2024.3.20）

海外での看護改革および国際看護におけるルーシー・オズバーンの適性

豪州で最初の病院が設置されたジョージ・ストリートから、ナースズ・ウォーク Nurses Walk に通じる小道 (写真 8) を進むと、2つの記念碑を見つけることが出来る (写真 9)。一つは、ナースズ・ウォークという小道について、その名称の由来を示唆するように「1788年～1816年にかけてこの地区にあった病院のナースは受刑者の中から選ばれていた」と記されている。その隣に、オズバーンの記念銘板が掲げられており、1868年にオズバーンと共に5人の看護師がシドニーへ到着したことや、シドニー病院の最初の女性総監督がオズバーンであったことが刻まれている。ここからは、女性総監督オズバーンについて、国際看護に必要とされる態度、知識、能力等からその適格性を考察し、海外で看護改革を成し遂げることが出来た背景を探っていききたい。



写真 8 ナースズ・ウォークに入る小道
(撮影 筆者 2024.3.18)



写真 9 ナースズ・ウォークとオズバーンの記念碑
(撮影 筆者 2024.3.18)

1. オズバーンの気質と看護改革

オズバーンは英国・ヨークシャー出身であり、その話し方にはヨークシャー・アクセントがあったと残されている[6]。ヨークシャーの風土に根付いたヨークシャー気質(頑固で風変わり)というものがあると言われており[21]、これにオズバーンが該当するのかは定かではないが、ナイチンゲールが抱いた印象によると、オズバーンは、ぶっきらぼうで男っぽいというものであった[2]。しかし、オズバーンについては、独立心があり、並外れたところがあっても、飾りっ気のないヨークシャー女性という好意的な解釈や、しっかりとした性格で平静な気質の持ち主との評価もある[2]。このような側面のあるオズバーンだからこそ、性格も能力も年齢も異なる5名の看護指導者を束ねるリーダーとして適任だったとも考えられる。さらに、国際看護活動については、派遣先で必ずしも歓迎されず、現地の人々のやり方を変えようとするや煙たがられる存在になる可能性があることから、心のしなやかさやコミュニケーション能力が求められる[9]。まさに、シドニー病院に到着したオズバーンを待っていたのは、彼女の批判をはじめ病棟夫や巧妙な邪魔をするレジデント医であった[1]。また、オズバーンが到着した頃のシドニー病院では、病棟管理は病棟夫に任されていたために、全病棟の実質的な権限をオズバーンは持っていなかったが、病棟が床ジラミやノミ、汚物と悪臭で満ちていることでの批判が、総監督のオズバーンに向けられた[8, 18]。しかし彼女は、口論を避け、状況を確認した上で、その結果を冷静に説明するようにしていた。着任後しばらくは病院の状況を理解するようにし、慣習に従って、最初は女性病棟だけの管理にとどめ[2, 18]、看護改革を進めるうえで、どうしても辞めてもらいたい人たちに対して、最後は一人一人と握手をしてお別れするなど[4]、穏やかな対応に努めた。このように平静な気質の持ち主であったことや、並外れたところがあっても、ナイチンゲール式看護の導入に伴う病院・看護組織の改革、病棟夫(男性ナース)の女性ナースへの置換え[7, 15]、ユニフォームの改革など、いくつもの変革をもたらし、やり遂げることができた理由の一つではないかと考える。

2. オズバーンの専門的知識と業務管理能力

オズバーンよりも、彼女に同行した看護師のほうが看護経験は上であったと記されている[6]。しかしオズバーンは、ナイチンゲール学校での訓練終了後から豪州へ派遣されるまでの間、キングスカレッジ病院で助産について短期間であるが学び[6]、ドイツの病院でも研修を積んだ[4]。豪

Miyagi University Research Journal

州への派遣前には、看護体制を改善するためにリバプールに派遣されたアグネス・ジョーンズ(おそらくナイチンゲールの一番弟子)を訪問しており、看護管理者として直面するであろう困難や対処について学んだのではないかと考える。また、シドニー病院内のナイチンゲール式看護学校においてオズバーンは、解剖、病理、感染症患者への看護、様々なギブスを用いた包帯の巻き方に関する講義を行っており[16]、専門的知識は確かであったと言える。

3. オズバーンの異国・異文化への適応力

異文化に飛び込み、自ら異文化への感受性を磨くことが、国際看護を実践するうえでの適性を備えることの一つになる[9]。オズバーンについては、父親がエジプト考古学者であったことや従兄がエルサレムの英国病院で外科医をしていたこともあり[4, 6]、若い頃から中東を訪れるなど、異文化への豊かな感受性を持っていたと考えられる。さらに、オズバーンは語学堪能で、医学に必要なラテン語に通じ、その他複数言語を習得しており[6, 14]、ドイツから豪州への亡命者がシドニー病院へ来た際には、ドイツ語が分かるオズバーンが対応したとある[5]。そして、もう一つ、国際看護においては、異国の気候・風土で体調不良に陥ることがないように、健康管理能力も求められる[9]。オズバーンの場合は、若い頃の中東への旅行の影響か、マラリアや赤痢による後遺症(突然悪寒が生じること)があり、インドへの派遣要請もあったが、症状悪化が危惧され、派遣されなかった[2]。しかし、英国に比べて寒暖差が少なく冬も過ごしやすい豪州の方が、オズバーンの健康のためには良いとされ[6]、オズバーン自身も健康管理のためにシドニー行きを希望したとのことである[7]。このように、むしろ彼女自身の健康保持の上で豪州の気候が適していたことや異文化への適応力を備えていたことも、シドニー病院の女性総監督としての活動を継続できた背景の一つではないかと考えられる。実際、豪州派遣は当初3年間の任期であったが、最終的に16年8か月間シドニー病院で奮闘し、ナイチンゲール式看護を軌道に乗せた[4]。

オーストラリアにおける多文化・異文化に配慮したケア

1. 多様な民族・人種に配慮したケア

豪州の多民族・文化・宗教の歴史を紐解くと、1820年～1850年の間について、豪州への移民の数が、英国から送られてきた囚人の数より上回っていたとある[11]。豪州では多文化主義政策をとっており、ニューサウスウェールズにおいては、住民の約24%が海外生まれであり、これは豪州国内最大の割合となっている[22]。このような社会的状況ゆえに、看護学の教育課程において文化ケア *culturally sensitive care* は必須科目とのことである。実際、シドニー大学の看護演習室には、様々な人種・民族のマネキンが、演習用ベッドに準備され(写真10)、患者の状態をアセスメントする際に、民族・宗教について必ず考慮するように設定されていた。



写真10 シドニー大学の看護演習室(撮影 筆者 2024.3.18)

演習用ベッドの近くには、ラミネートされたイズバー ISBAR シートが置かれており、自己紹介と患者の確認 *Identification*、状況 *Situation*、背景 *Background*、アセスメント *Assessment*、提案 *Response/ Recommendation* といった系統的な情報伝達の練習ができるように準備がされていた。演習室の壁に設置されている電話の傍にもイズバーシートが吊り下げられ、電話による

Miyagi University Research Journal

情報伝達の練習もできるようになっていた。その他、驚いたことは、複数の様々な人種のマネキンが設置されているのは、同時に複数の患者を受け持った場合のケアの優先順位を決める演習のためであるということであった。多文化・多民族社会を反映した臨床状況に近い設定での高度な看護演習を行っていることに驚嘆した。

2. ファースト・ネイションズへ謝罪と敬意

異なる民族・文化・宗教を尊重した社会を構成していく理念とその取り組みが、豪州全体に普及しているが、先住民アボリジニへの配慮と文化を大切にしている取り組みは、1999年に国家としての謝罪を示してからになる[23]。英国の探検隊がニューサウスウェールズ・シドニーに到着し[11]、占有植民地化に本格的に動き出して以来、アボリジニは土地を奪われ虐殺の対象となっていた[24]。1960年代の半ばまで、国民調査の人口にも含まれていなかったようであるが[23]、歴史的な反省のもと今日では、アボリジニへの配慮とその文化を守る姿勢を表明している。昨今では、アボリジニという言い方には差別的な側面があるとして、アボリジニナル・ピープルズ Aboriginal peoples と改め、先住民への敬意を込めて、ファースト・ネイションズ First nations という表現も増えてきている。豪州社会全体として、ファースト・ネイションズへの敬意を示すとともに、病院やリハビリテーション施設でもその意を表明している。例えば、ニューサウスウェールズ・リズモアにおいて、病院の展示物や壁の装飾に、積極的にアボリジナルアートを取り入れている精神保健施設があり（写真 11, 12）、ファースト・ネイションズの世界と文化的価値を尊重した姿勢を伺うことが出来た。



写真 11 精神科外来の待合室にあるアボリジナルアート

(撮影 筆者 2023.3.24)



写真 12 精神病院エントランスのアボリジナルアート

(撮影 筆者 2023.3.24)

また、ニューサウスウェールズ・シドニーにある高齢者施設の廊下には、アボリジナルアートがプリントされたポスターが掲示されていた（写真 13）。このポスターは、シドニー南東部における地域保健部門アボリジナル保健課の掲示物であり、その保健課は、ファースト・ネイションズへの健康課題への取り組みや文化に配慮した疾病予防を行っている。このアボリジナル保健課のウェブサイトを見ると、「先住民の土地に私たちが立ち、その土地に、私たちの部門があることに感謝します。私たちは、過去、現在、未来において、その長老への敬意を払います」とファースト・ネイションズへの謝辞が掲載されている[25]。高齢者施設における、ファースト・ネイションズの文化と伝統に対する敬意は、その土地・地域に対して、そして患者ケアの上で行われ、さらにアボリジナル出身の看護スタッフに対しても行われている。この高齢者施設の看護部長が、ファースト・ネイションズにとって特別な日に、「煙を焚く行事 smoking ceremony を一緒にしました」と話していたことが印象的であった。



写真 13 高齢者施設に掲示されていたアボリジナル保健課のポスター（撮影 筆者 2024.3.19）

3. ファースト・ネイションズ健康増進のための文化ケア

豪州政府として認識している先住民は、アボリジナルだけでなくトレス海峡諸島民も含まれており[26]、豪州看護協会では、「豪州国民の健康についての重要課題の一つが、豪州におけるアボリジナルとトレス海峡諸島民の健康増進である」と述べている[27]。その背景には、ファースト・ネイションズの平均寿命が、その他の豪州国民と比較すると10～17年短く[25, 28]、この健康格差を埋めること、そして、文化的に安全 *culturally safe* で、質の高いケアを提供することが、豪州における看護専門職の重要な役割になっている。豪州で最もファースト・ネイションズの数が多いニューサウスウェールズのアボリジナル保健局は「アボリジナルの健康のための声明」を発表し[29]、アボリジナルとそうでない人々との健康格差を少なくするための政策、理念、方策について、ニューサウスウェールズの全ての医療施設に向けて情報を発信し、周知を図っている。

オズバーンのシドニー病院での看護改革に関する書籍・資料を見る限りでは、ファースト・ネイションズへの文化的に安全なケアや文化に配慮したケアに関する記述は見つけられなかったが、今日の豪州では、ファースト・ネイションズへの文化ケアに関するフレームワークやガイドラインが示されており[30-32]、文化に配慮したケアを提供するための知見が蓄積されているといえよう。そのため、シドニー大学看護学部での授業科目の一つに「アボリジナルとトレス海峡諸島民の健康 *Aboriginal and Torres Strait Islander Health*」という講座があり、全13回の授業を通して、ファースト・ネイションズの文化、歴史、健康課題について理解し、文化に配慮したケアや保健サービスの在り方等について学べるように準備されていた。

おわりに－日本における看護政策・看護教育の更なる発展のための示唆

本稿では、豪州における看護について、ルーシー・オズバーンによる看護改革の前後を比較しながら、その歴史を振り返った。そして、今日の豪州における多文化・異文化に配慮した政策とそれを反映した保健医療サービスでの取り組みや看護教育の一側面を例に挙げながら考察を進めてきた。これらの歴史の変遷を大まかに整理すると、一つには、オズバーンによるナイチンゲール式看護の導入以降、豪州全体に現代看護が普及され、次の段階として、すべての看護教育が大学教育化したことにより、一定の水準の知識・技術・能力をもった看護専門職による看護が豪州全体に行き渡るようになったといえる。日本の場合は、看護師になるための道が、専門学校、短期大学、大学と複数あるが、今後の日本の看護の質保証のためには、豪州のように大学教育に一本化するというアイデアが将来提案されても不思議ではないと考える。また、多文化・異文化看護の側面から、日本の状況を見ると、豪州のような多文化主義政策を積極的に取っているわけではないが、外国人が増えてきていることは確かである[33]。そのため、豪州看護教育において文化ケアが必須科目になっているように、文化に配慮したケア、あるいは異文化看護に関する学習が、日本の看護系教育機関における重要な科目の一つとして位置づけられることは、国内の外国人へのより適切な看護の実現のために必要であると考えられる。

最後に、ファースト・ネイションズへの敬意と文化に配慮した看護に関して、日本について考えると、アイヌ民族が該当するだろう。「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」が2019年に制定されたが、アイヌ文化に配慮した病院や看護については、ほとんど聞いたことがない。また、アイヌ民族の健康状態に関する資料は乏しい[34]。豪州と日本とでは、歴史的にも現在においても状況が異なっているかもしれないが、ファースト・ネイションズとしてのアイヌ民族への謝罪と敬意、アイヌ民族やそのルーツを持つ人々の心身の健康のための文化ケアについて検討することも、日本に暮らす全ての人々の健康の保持増進を担う看護専門職に必要なことではないだろうかと思われる。

文献

1. Griffith, J., *Osborn, Lucy (1836-1891)*. Australian Dictionary of Biography. Vol. 5. 1974: Melbourne University Press.
2. Cope, Z., 三輪卓爾(訳), *ナイチンゲールと六人の弟子 (Six disciples of Florence Nightingale. 1961: Pitman Medical)*. 1972: 医学書院.

Miyagi University Research Journal

3. 福田邦三, 永坂三夫, 久永小千世, ナイチンゲールとセント・トーマス病院：ナイチンゲール生誕200年記念出版. 2020: 日本看護協会出版会.
4. MacDonnell, F., *Miss Nightingale's young ladies : the story of Lucy Osburn and Sydney Hospital*. 1970: Angus and Robertson.
5. Godden, J., *Matching the Ideal? The First Generation of Nightingale Nursing Probationers, Sydney Hospital, 1868-84*. *Health and History*, 2003, 5(1): p. 22-41.
6. Godden, J., *Lucy Osburn, a Lady Displaced: Florence Nightingale's Envoy to Australia*. 2006: Sydney University Press.
7. Sydney Hospital Graduate Nurses Association. *Person Osburn, Lucy (1836 - 1891)*. The Encyclopedia of Australian Science and Innovation. 2018 [cited 2024 5.29]; Available from: <https://www.eoas.info/biogs/P004670b.htm>.
8. Corderoy, A., *Bicentenary of a hospital built from a rum deal*, in *The Sydney Morning Herald October 29*. 2011, The Sydney Morning Herald: NSW.
9. 森淑江, 山田智恵里, 正木治恵, *国際看護：国際社会の中で看護の力を発揮するために*, 看護学テキスト nice. 2019: 南江堂.
10. NSW Migration Heritage Centre. *1788. THE FIRST FLEET, BOTANY BAY AND THE BRITISH PENAL COLONY*. 2010 [cited 2024 5.30]; Available from: <https://www.migrationheritage.nsw.gov.au/exhibition/objectsthroughtime-history/ott1788/>.
11. 関根政美, *概説オーストラリア史*. 有斐閣選書. Vol. 915. 1988: 有斐閣.
12. The National Museum of Australia. *First public hospital*. 2023 [cited 2024 5.28]; Available from: <https://www.nma.gov.au/defining-moments/resources/first-public-hospital>.
13. Sydney Harbour Foreshore Authority. *The First Hospital*. 2012 [cited 2024 5.30]; Available from: <https://thedirt.on.therocks.com/2012/03/first-hospital.html>.
14. Lowe, T. *Lucy Osburn brings the Nightingale model to Australia*. Nurse education in Australia: Part 2 in Australian College of Nursing 2020 [cited 2024 8.19]; Available from: <https://www.acn.edu.au/nurseclick/nurse-education-in-australia-part-2>.
15. Godden, J., *Nursing*. Sydney Journal, 2008, 1(3): p. 29-35.
16. Griffiths, V.J., *"Caps and veils" : the nursing history of the Sydney Hospital matrons and its nurses 1788-1985*. 2011, Jingzhe Li: Kogarah, NSW, Australia.
17. Burrows, D., *Nurses of Australia: The Illustrated Story*. 2018: National Library of Australia.
18. Power, J., *Magnificent obsession' with nursing history gets stamp of approval*, in *The Sydney Morning Herald March 5*. 2018, The Sydney Morning Herald: NSW.
19. Fortescue, E., *Curator who saved paintings and body parts for Sydney*, in *The Sydney Morning Herald April 24*. 2023, The Sydney Morning Herald: Sydney.
20. 井上久美代, *オーストラリアン・ナーシングの幕開け フローレンス・ナイチンゲールの影響*. 看護技術, 2001, 47(4): p. 438-444.
21. Gaskell, E.C., 中岡洋(訳), *シャーロット・ブロンテの生涯 (The life of Charlotte Brontë. 1857: Smith, Elder & Co.)*. ブロンテ全集. Vol. 12. 1995: みすず書房.
22. 自治体国際化協会 シドニー事務所, *オーストラリアの多文化主義政策*. Clair Report No.358, 2011.
23. 杉本良夫, *オーストラリア：多文化社会の選択*. 2000: 岩波書店.
24. 坂口清, *人為的災害を被った人々 オーストラリア先住民の事例*. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 2016, 12: p. 30-36.
25. South Eastern Sydney Local Health District. *Aboriginal Health Unit*. 2024 [cited 2024 5.25]; Available from: <https://www.seslhd.health.nsw.gov.au/services-clinics/directory/aboriginal-health-unit>.
26. AIHW (Australian Institute of Health and Welfare). *First Nations people*. 2024 [cited 2024 5.25]; Available from: <https://www.aihw.gov.au/reports-data/population-groups/indigenous-australians/overview>.
27. The Australian Nursing and Midwifery Accreditation Council (ANMAC) *Inclusion of Aboriginal and Torres Strait Islander Peoples*. 2007, ANMAC.
28. AIHW (Australian Institute of Health and Welfare). *Profile of First Nations people*. 2023 [cited 2024 5.25]; Available from: <https://www.aihw.gov.au/reports-australias-welfare/profile-of-indigenous-australians>.
29. Centre for Aboriginal Health, *NSW Health Aboriginal Health Impact Statement*. 2017, NSW, Australia: NSW Health.
30. Congress of Aboriginal and Torres Strait Islander Nurses and Midwives (CATSINaM), *Towards a shared understanding of terms and concepts: strengthening nursing and midwifery care of Aboriginal and Torres Strait Islander peoples*. 2014, Canberra, Australia: CATSINaM.
31. Australian Commission on Safety and Quality in Health Care, *User guide for Aboriginal and Torres Strait Islander health*. National Safety and Quality Health Service Standards. 2017, Sydney.
32. AIHW (Australian Institute of Health and Welfare). *Cultural safety in health care for Indigenous Australians: monitoring framework*. 2023 [cited 2024 5.25]; Available from: <https://www.aihw.gov.au/reports/indigenous-australians/cultural-safety-health-care-framework/contents/background-material>.
33. 総務省自治体行政局住民制度課, *住民基本台帳に基づく人口, 人口動態及び世帯数 (令和6年1月1日現在)*. 2024 [cited 2024 7.26]; Available from: https://www.soumu.go.jp/main_content/000892947.pdf.
34. 上村英明, *「健康の社会的決定要因」からアイヌ民族差別を考える：先住民の健康問題に関する日豪比較研究に向けて*. 恵泉女学園大学紀要, 2017, 29: p. 133-146.